

大正十二年蓼沼丈吉翁追悼録に寄せられた序

侯爵 大隈重信

人間は生れながらにして共同生活を為すべき性質を有している。家庭とか、地方自治体とか国家とか云うものは、要するに、共同生活の様式と其の状態の相違に過ぎないのである。即ち家庭は共同生活の最も小なる団体であるが、団体の関係は最も密接である。共同生活の最大なる団体は全人類でなければならぬが、今日は其の関係が未だ極めて浅薄である。一国家内に於ける国民相互間の関係は可なり密接なるものありと雖、姓的不平、階級的闘争、貧富間の反目等ありて、国家、社会の安寧秩序未だ完からざるは、畢竟、人類が未だ共同生活の理想を實現し得ざるに由るのである。

惟うに、宗教及び道德の教うる所の慈悲と云い、仁義と云い、四海兄弟と云うことも、哲学や政治学の眼目とする自由、平等、国利、民福の増進と云うが如きことも、共同生活を全からしめん為の精神に外ならぬのである。即ち貧困者を救済するが慈悲であり、己の欲する所他にも之をなし、己の欲せざる所は他にも之を為さざるが博愛であり、之を弘く世界人類の上に及ぼすが四海兄弟の義であり、又仁義である。

そこで、宗教家の説く所も、道德家の主張する所も、教育家の教うる所も、哲學家の研究する所も、乃至は政治家の行う所も、其の目的は、社会人類の幸福増進、共同生活の向上改善と云ふ一点に帰着するのである。但だ異なる所は、その携わる方面即ち立場の相違に過ぎないのである。困て苛も生れて人となり、共同生活の一員たる以上、共同生活の意義と様式の方法とは、各人が或る程度までは心得置くべきものである。必ずしも専門的宗教家若くは道学者ならずとも、宗教的・道德的・信念は之を有たねばならぬ、又哲学的・人生觀も無ければならぬ、更に此の信念と人生觀の上に立てる政治知識も必要である。人類の共同生活は、各人の此の理解に依るものでなければ、その円満、向上、進化は到底望まれないのである。

此の心得を今日直ちに各人に期待することは無理な注文かも知らんが、世の先覚者たる者は、義務として不覚者を指導誘接し、直接間接に、専門的宗教家、教育家、政治家と協力して社会の進歩發達の為に貢献する所がなければならぬ。斯くの如き民間の篤志家を称して、国士志士、有志などというのであるが、志士、有志と云うものは、表面の局にこそ当らざれ、或る意味に於いては隠れたる政治家である。寺院や教会で説教こそなさざれ、学校に於いて教鞭こそ執らざれ、宗教上の実行家であり、教育上の実物教示である。此等の人士こそ、真に生きては国家社会の宝であり、死しては国家若くは地方自治体或いは社会事業上の守護神に祀らるべき者である。

故蓼沼丈吉氏は、明治の初年頃から自由民権論者の一人として、吾輩と俱に改進黨降りては進歩党に属し、曾ては衆議院に席をも占めたことがあった。中途にして表面政界を退いたが、裏面に於いては常に後輩を扶けて、有能の士を議政壇上に送ることを忘れなかった。人と為り謹直にして情に厚く、終生貧困者を憐み、有為の青年を助けなどして、社会事業、育英事業及び地方自治開發の為に貢献する所尠からざりしと聞いている。誠に人生の最高事務たる共同生活の進歩向上の為、国事、地方自治、社会事業、産業開發等有らゆる方面に有らゆる方法を以て尽瘁したる其の功績は、永く郷党子孫に伝えて、好模範とするに足るのである。翼くば積善の家に飴恵あらんことを。